

江戸時代の暦 復元ワークショップ

須賀 隆¹

1 はじめに

暦の会会長の故岡田芳朗先生がご逝去されてから、はや一年あまり経過しました。その岡田先生が生前「暦の会」の来歴と現在の懸案事項をまとめた記事が、日本経済新聞平成26年(2014年)9月9日付紙面に掲載されています²。その後段の懸案事項の部分を下記に引用します。

近年、会でしばしば話題にあがるのが「2033年問題」だ。これは私たちの暮らしにも大きく関係する暦の問題である。(中略)この問題については、私も所属する「日本暦学会」や「日本カレンダー暦文化振興協会」とも協力しながら、議論を深めていきたいと考えている。

今年12月には第400回の例会を迎える。その記念事業として「江戸時代の暦 復元ワークショップ」を計画している。これは約300年にわたる江戸時代の暦を全面的に復刻し、吉凶の俗信に関する暦註もきちんと解説した書物を編さんするプロジェクトだ。これが実現すれば、古文書を解読したり、文芸作品を読んだりするときには大変役に立つ。会員のお力添えを得て、必ず世に出したいと考えている。

懸案事項は「2033年問題」と「江戸時代の暦 復元ワークショップ」のふたつです。このうち「2033年問題」については、昨年の8月に「日本カレンダー暦文化振興協会」から閏十一月を推奨するという見解が発表されて進展がありました。本稿ではもうひとつの懸案である「江戸時代の暦 復元ワークショップ」について状況を整理したいと思います。

2 過去の暦復元

日本の過去の暦を復元する試みとしては『日本暦日原典』³『日本暦日便覧』⁴『日本暦日総覧』などがあります。

このうち『日本暦日総覧』は岡田先生ご自身が編集に参加されたもので、さまざまな暦注を含めて具注暦のすべてを復元できるだけの情報を網羅しています。カバーする期間は、

「古代前期一具注暦篇」⁵ 501-から、

「具注暦篇 中世後期」⁶ 1500

まで、ちょうど1000年間です。諸般の事情により『日本暦日総覧』は15世紀の分までで刊行を終え、16世紀以降の部分が空白で残されることとなりました。

日本は世界的にも例外的に豊富な古文書が残されていますが、その分量は時代が下るにしたがって級数的に多くなります。古文書を解読したり、文芸作品を読んだりすると

いう用途であれば、暦復元の需要はむしろ江戸時代の期間こそ中心になるはずですが。

16世紀以降の部分の空白を埋めることが大きな懸案事項となるのはこのためです。

3 復刻しようとする暦

岡田先生の「江戸時代の暦 復元ワークショップ」のお誘い⁷からその刊行意図を下記に引用します。

古文書などを解読するとき、あるいは文芸作品を理解しようとするときに、その日が何をして良い日か、反対に何をしてはならぬ日か、を知っておくと大変都合です。

そのためには、その年の暦が手元にあると便利です。とはいえ、江戸時代の暦を入手して備え置くことは誰にもできることではありません。また、江戸時代の暦を所蔵し閲覧させてくれる図書館や博物館などの施設は極く僅かです。

そういうわけで、もし江戸時代の暦を復刻し、併せて釈文を付け、さらに暦の見方とか用語や暦註の解説を加えた本ができれば、本当に便利だと思います。

つまりゴールは、復刻した江戸時代の暦とその釈文を対照して一覧できるようにし、巻末に暦の見方と用語や暦註の解説を付した資料の出版です。

インターネット技術の進展により国会図書館のデジタルライブラリなどの試みがなされ、「江戸時代の暦を入手して備え置くことは誰にもできることではありません」という状況は変わってきています。しかし一方では、せっかく江戸時代の暦を備え置いても、その暦で用いられている変体仮名を読みこなせる人は少なくなっているのではないのでしょうか。したがって、復刻した江戸時代の暦とその釈文を対照して一覧できるようにすることは、やはり大きな意義があるように思います。

4 現状なにができるか

復刻した江戸時代の暦とその釈文を対照して一覧できるようにするには、復刻の対象となる江戸時代の暦と、その釈文を用意しなければなりません。

4.1 江戸時代の暦のデジタルイメージ

最近では江戸時代の暦のデジタルイメージが、インターネットで自由に閲覧できるようになってきました。国立天文台の「和漢書目録：附暦本類」⁸のデジタル画像や国会図書館のデジタルコレクションの暦本⁹は、変体仮名の個々の文字を読み取れる高精細画像です。筆者は国会図書

館の[古暦帖]の目録¹⁰を作り、任意の年月日のデジタルイメージを検索¹¹できるようにしました。

4.2 江戸時代の暦の自動生成

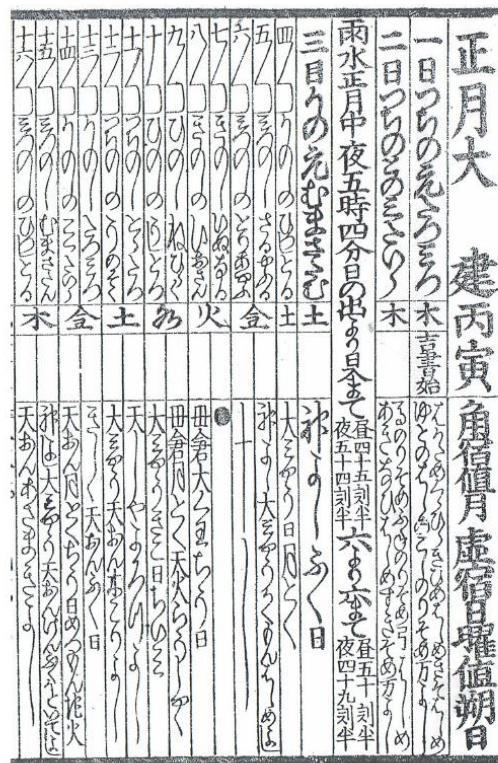
暦に記載されている暦注は、その暦注に応じた撰日法により日取りが決定されます。このためデジタルイメージを解読するまでもなく、知られている撰日法をもとにして暦をプログラムで自動生成することができます。筆者は[古暦帖]がカバーしている期間の暦を自動生成してインターネットから閲覧可能¹²にしています。

4.3 校訂

暦の自動生成は完璧にできるわけではありません。吉事注など下段の暦注には撰日法がはっきり解明されていない

ものがあるからです。したがって暦のデジタルイメージと自動生成した暦の暦注を比較して校訂作業を行わねばなりません。この校訂作業には、現在のところ人の手間がどうしてもかかってしまいます。1年分の校訂には3時間くらいはかかります。

校訂作業まで終えて、どのようなものができるか天保十五年正月前半の例を図に示します。見開き右頁に釈文、左頁にオリジナルの暦を配置する形式で、現状、享和三年(1803)分と天保十五年(1844)～弘化二年(1846)分の4年分が出来上がっています¹³。



正月	大	建	丙寅	角宿値月虚宿日曜值朔日
一日	つちのえだつ	みつ	木	角宿値月虚宿日曜值朔日 はかたにくらひらきひめはめ、まほはしめ 仲とはしめ、こしりそめ万よし
二日	つちのとのみ	たいら	木	馬のりそめふねのりそめ、月ほしめ あきなひはしめ、すまめ万よし
三日	かえむま	さたむ	土	夜四十五刻半 夜四十九刻半
四日	かえむま	とる	土	六より六まで 夜四十九刻半
五日	かえむま	やふる	土	神よし 月とく
六日	みづのどろ	あやふ	金	神よし 大みやう かくもほはしめ
七日	まのえいぬ	なる	金	大みやう 月とく
八日	まのえいぬ	おさん	火	● 十し
九日	ひのえぬ	ひらく	水	母庸大くわち日
十日	ひのえぬ	ちう	水	母庸月とく 天火 ちうしやく
十一日	つちのえだつ	ちう	土	天しやく まつよし
十二日	つちのえだつ	ゆそく	土	大みやう 天おん 木よし
十三日	かえむま	あ	金	ましく 天おん 月とく
十四日	かえむま	たいら	金	天おん 月とく ちう日 めつもん 地火
十五日	みづのどろ	さたん	木	神よし 大みやう 天おん けんふく かたむてよし

5 課題

課題はなんといってもボランティアを募ることです。計算上は10人のボランティアが毎週3時間このワークショップにご協力いただければ、江戸時代260年分は半年で

完成する勘定です。ぜひワークショップの意義にご賛同いただき、多くの方にご協力いただければと希望いたします。

¹ 暦の会会員 SGB02104@nifty.com
昨年度版論文「貞享暦の日行盈縮と定朔」に訂正があります。http://suchowan.at.webry.info/201506/article_8.htmlをご覧ください。

² <https://www.facebook.com/624560220889288/photos/a.641445895867387.1073741826.624560220889288/863934133618561/?type=1&theater>

³ <http://id.ndl.go.jp/bib/000002189245>

⁴ <http://id.ndl.go.jp/bib/000002048879>

⁵ <http://id.ndl.go.jp/bib/000002308976>

⁶ <http://id.ndl.go.jp/bib/000002403074>

⁷ <http://www.asahi-net.or.jp/~jc1y-ishr/Kyuureki/EdoCalendar/>

⁸ <http://library.nao.ac.jp/cgi-bin/db/library.cgi?class=05>

⁹ <http://www.asahi-net.or.jp/~dd6t-sg/pcs/where.pdf>

¹⁰ https://github.com/suchowan/when_exe/blob/master/test/events/ndl_koyomi.csv

¹¹ http://suchowan.at.webry.info/201511/article_7.html

¹² http://suchowan.at.webry.info/201405/article_6.html

¹³ 画像はインターネット上のものではなく岡田先生からご提供いただいたものです。